
イン箱

九九人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
イン箱

【Nコード】
N3787Y

【作者名】
九九人

【あらすじ】
失恋もの。女子校を卒業し大学生になった広田千登勢には好きだった幼馴染がいたが、その幼馴染にはすでに恋人がいた

窓際から地上を眺めた。

日光が放射線を撒き散らし、コンクリートの照り返しで日本は好み焼きの鉄板のように熱くなっている。その鉄板の上では汗水たらして遊びまわっている子供たちが、何がそんなに楽しいのか飛んだり跳ねたり、公園のベンチの上でカードゲームをしたりしている。彼らにとって、クーラーのきいた部屋よりも友達と遊べる外ほうがよほどいいようだ。

それでも、昔よりも公園で遊んでいる子供は減っている気がする。室内で、それも一人で遊べるゲームが多くなってきた影響なんだろうか。私たちの時代だってそりゃあ、ゲームボーイとかあったけど、今の子供たちのほうがゲームに関しては恵まれている。なんだ3DSって。まるきりSFの世界だ。

「少年たちよー、外で遊んだほうが健康的だぞー。部屋で涼んで寝転んでばかりいると豚になるぞー」

気の抜けた声で、日本中の子供たちに喚起を促してみた。まあ、部屋の中で冷房の設定二十五度にして、ガリガリ君（ソーダ味）しやくしゃく食べてる私が言えた義理じゃないんだけどね。

なんともくだらない夏休みだった。

大学を無為に過ごして半年、適当なサークルに入ってそれなりに知り合いはできたけどいまだ彼氏なし。一人っ子で、中、高と女子校に入れられ蝶よ花よと育ててきた箱入り娘な私に男の扱い方などわかるはずもなく、今日もこうして空虚な夏休みを過ごしている。大学生になって初めて携帯電話を持ったと言ったら、大学の友人から笑われた。

そんな私、広田千登勢。

女一人、十九歳の夏休み。

暇である。虚しいほどに。

「暇だー。私は暇だーだから私にかまえ全国の男共ー」

……などと、かまってちゃんを心の中で演じてみても仕様のないことだった。仕方ない。仕方がない事なのだ。仕方がないので私は今にも交尾しだしそんな隣家のカップルにちょっかいをかける事にした。

窓を開け、ベランダに出ると夏の匂いがした。クーラーの効いた室内とは別次元の世界。肌から汗が浮き出た。私は手でラッパをつくって叫んだ。

「昼間っから乳繰り合ってんじゃねー。リア充爆発しろー」

実際は、カップルたちはソファーに座ってテレビを見ているだけだった。肩に手をまわしていなければ甘そうな会話を交わしているような気配もない。借りてきたDVDでも見ているのだろうか、二人ともテレビに興じている様子だった。

私に気付いたのは女の方だった。ソファの奥に座っている女と目が合う。私は舌を出してみせた。女は眉をしかめて視線をまたテレビ画面に戻した。

男のほうは最後まで私に気付くことはなかった。

「……爆発しろ」

私はなんだか急に恥ずかしくなって、逃げるように自室へ入った。視線を外す前に見えたカップルの男の横顔は、長年想い続けていた彼の顔とはまったく似ていなかった。

「……コウくん」

女子校時代、地元の隣の家に異性の幼なじみがいる、という事を
うっかり話してしまった事がある。

女子はみんな飢えている。そういう話と甘いお菓子にはよく食ら
いつく。彼女たちは肉食動物かピラニアさながらにこちらに群がり、
私を取り囲んだ。詳しく訊くまで解放しない、と無数の目たちが語
っていた。

餌になるのはごめんだけど、会話の中心にいるのはちょっと嬉し
かったのでつい色々喋ってしまった。

その男の子とは幼稚園と小学校が一緒だった。親同士も仲が良く
て、必然的に私たちは一緒に遊ぶ機会が多かった。親たちからはま
るで兄妹のようね、と言われてきた。

今思えば、自分たちとしてはそれほど仲が良いとは思っていないか
ったように思う。ただ近くに同い年の子供がいたから一緒に遊んで
いた、くらいの感覚だった。小学校に通い始めてからは互いに同性
の友達と遊んでいた。

それでも、中学に上がって私が両親の元を離れて寮へ引っ越しす
る直前には、彼は私にお別れを言ってくれた。何故かプーさんのカ
レンダーもくれた。何でお別れのプレゼントにカレンダー？ まあ、
小学生の感覚なんてそんなものなんだろう、私もそれなりに喜んで
た覚えあるし。プレゼントを贈っただけ小学生にしては気が付く方
だったと思う。けど、誓って言う。私はその時、彼の事なんて何と
も思っていなかったし、多分彼も私の事をただのお隣さんだと思っ
ていただろう。

淡い初恋とかそんなんじゃない、ただのお隣さん。

……だっというのに、私がそんな話を女子たちジュニアの前ですると、彼
女たちはきゃーきゃー騒ぎ出した。

「幼なじみ！　なんて甘美な響きでしょう！」

「きゃー初恋！　幼なじみとの淡い初恋！　それなんてエロゲ？　それなんてエロゲ？」

「もしかして千登勢、そのコウ君からもらったカレンダーって、いまだ大切に持っていたりするわけ？」

あまりの食らいつきと勘違いっぷりに、若干ひいた。どうしていか分からず、とりあえず正直にカレンダーは部屋の勉強机に置いてあることを言うと、どっと歓声が沸いた。

「それって何？　あなたも心の中ではそのコウ君の事を想い続けているって事よね？」

「素敵！　離れ離れになって、互いに想いも伝えていないのに互いの事を想い続けて……ロマンスね！」

「きつと、その男の子、待ってるわよ、あなたが帰ってくるのを！」

私は女子たちが盛り上がる中、一步冷めた目で見つめていた。けれど、繰り返し、繰り返し、毎日からかいの言葉とともに（あなたには地元で待っている幼なじみがいるもんねー）揶揄されていると、しだいに（何とも愚かしい事に！）私は、彼の事が好きになっていたのだった。見事に私は踊らされていた。

私の脳内には、私が地元に戻るのを待っている少年の姿がありありと映っていた。彼の顔は成長し、精悍で男らしく、それでいてどこか中性的な一面を持つ美少年になっていた。自分が贈ったカレンダーは今でも大事に持っているのだろうか、自分の事を忘れていないだろうか、そんな心配そうな顔をしないで。私は今でもあなたの事を想っています。カレンダーだって、ちゃんと持ってるよ！

なんて、狗も喰わない茶番を妄想の中で繰り返していた。

私は一刻も早く地元に戻りたかった。しかし、そこをぐっと我慢した。私たちの愛は、この程度で崩れるような事はないと固く信じていた。むしろ彼を焦らす私って悪女？　なんて本当に考えていたりもした（本当に本当に黒歴史。抹消したい）。もうこの頃には、しばらく会ってもいないコウちゃんと結婚する事に全く疑問を抱かな

かった。

そんな夢見る妄想少女のスイーツな世界は、高校卒業と同時に崩れ去った。

寮から実家に戻った私は衝撃の事実を知る。
お隣さん家のコウくんは彼女が出来ていた。

間

「愛しているよ、千登勢」

それは夢だった。まごう事なき夢だった。夢の中の出来事なんて何も気にする必要もないし気に病む必要もないし、全くもって常人には理解できないものだ。だから私は自分の夢の中で起きた出来事を起きた後思い出す必要はない。

目の前に想像そのままのコウくんがいた。『精悍で男らしく、それでいてどこか中性的な一面を持つ』コウくん。彼は全裸だった。すっきりとした身体つきで無駄な肉がなく、ギリシア彫刻のように完成しつくされた肉体だった。股間のものは、私が実物を見た事がないせいなのか、黒ずんで靄がかかったかのように見えない。

私はその全裸のコウくんに、ベッドへ押し倒されていた。室内は薄暗く、ベッドの脇に置かれたスタンドランプの明かりで私とコウくんの影が、ぼんやりと壁に写っている。

「愛しているよ、千登勢」

その二人分の影が、一つに重なった。

重なった唇が、熱かった。人との接触がこんなに熱いものだなんて、考えた事もなかった。あまりに熱すぎて、溶接されてしまうのではないかと思うくらいだった。

キスをしたままコウくんの手が、指が、私の身体をまさぐる。衣服を一枚一枚脱がされていく。一糸まとわぬ姿になって、唇が離れる。二人の唾液が銀の糸になって、消える。

「愛しているよ」

またこの言葉。彼の言葉には魔法がかかっているみたいに心に深く突き刺さる。言葉に縫い取られ、私は動けなくなる。コウくんが私を抱きしめた。暖かい。熱い。身体が溶解する。私たちは溶けて、溶け合って、肌の接着している部分から同調していく。線はなくなり、私とコウくんの境目が曖昧になり、足と足、手と手、胸と胸、

臓器と臓器、全てが溶け合い意味を成さなくなる。「愛しているよ」もはやどちらの口なのかも分からない唇から言葉が漏れ出る。「愛しているよ」「愛しているよ」「愛しているよ」「愛しているよ」愛しているよ愛しているよ愛しているよ「愛しているよ」お腹一杯になるほど「愛しているよ」が頭の中を満たし、急速に二人の身体が冷えていく。冷えて、固まって、私たちは溶け合ったまま一つの物体になる。彼と私は本当の意味での一つになり一人の人間になる。一人の人間になった私はベッドから起きて自分の部屋を出て、台所に行った。コップにカルキ臭のする水道水を出して、それを飲んだ。水道水はコップから口の中へ、口の中から喉へ、喉から胃へ。そこから血管やリンパ管まで隅々まで私の身体に浸透していく。私でないものが私の中に入り込んで、水道水とか妄想上のコウクんとかさつき食べたガリガリくん（ソーダ味）が箱の中でごっちゃんになって、そうやって広田千登勢十九歳という私が出来上がる。

私は自分の部屋に帰り、ベッドに潜り込んで寝直した。

三

八月も終わりにさしかかった頃、私は公園のベンチでぼんやりと子供たちのサッカーを眺めながら、とりとめのない事を考えていた。自分が世間知らずなの箱入り娘だという事は、きちんと自分で自覚している。

狭い価値観しかない箱庭のような学園で育てられて、勝手な妄想を外に持ち込んで勝手にフラれた。箱の中だけで好きにキャツキヤウフフしていればいいのに。これはただそれだけの話だ。なのに今、身勝手な失恋から半年を経過しようとしているのにいまだにそれをひきずっている。そんな私より、子供たちのほうがずっと充実した夏休みを送っていた。

子供たちのサッカーは、自宅の二階から眺めているだけでは分かんなかったが、彼らと同じ目線に立ってみると彼らの真剣さがよく分かった。

四対四の変則ルール。ゴールは三角コーンを二つ並べただけの簡素なもの。けれど彼らの目はプロの選手よりも燃えていた。

通常よりせまいコート。必然的にゴールを決める回数は常より多い。点数は目まぐるしく上下する。

「よっしゃ、ゴール！」

「くそつ、負けねえ！ 攻めろ、みんな！」

片方が点数を決めればもう一方のチームが返す。一進一退の攻防。その時、片方のチームのキーパーが動いた。自分の持ち場を離れ、コートへと躍り出た。啞然とする敵チームをかいくぐり、キーパーだった子はボールを蹴って相手ゴールヘシュート。普通の試合ならば有効とは言えない戦法だが、少ない人数、狭いコートであるこの試合でオフエンスの人数差は脅威になる。それに対抗してもう一方のチームのキーパーまでコートに入ってさらに泥沼になった。

なんというか……楽しい。こんなにふざけた試合にも関わらず、

子供たちは相変わらず、真剣だ。泥沼な試合になろうとも、汗でべとべとになろうとも、子供たちは勝利を目指して貪欲にボールを求め走る。私の目は自然に、ボールの動きを追いかけていた。

「隣、いいかい？」

観戦に夢中になっていた私は、誰かが近づいてきた事にも気付かなかった。

私に話しかけてきた人物はコウくんだった。お隣さん家の幼なじみで、私の頭の中にいるコウくんとはまったく別人のコウくんだった。

童顔、と言えば聞こえはいいのだろうけど、本当に私と同年なのかと疑ってしまうほどに顔、服装ともに垢抜けていない感じがする。安物のシャツに色褪せたジーンズ。遊びなれていない、安直な言い方をさせてもらえば「ダサイ」男だった。

しかし、こんな男にも恋人がいるわけで対する私には生まれてこの方いないわけで。

「だめ」

断られるとは思ってなかったのだろう、彼は目をぱちくりとさせた。

正直、今は誰にも近寄ってほしくなかった。それがコウくん——失恋の相手となればなおさらだ。まあ、身勝手な失恋ではあるのだけれど。

「来んなハゲ。私の前からいなくなって」

ここまで言えば怒ってどこかに行ってしまうだろうと思ったが、意外にもコウくんはさも可笑しそうに表情を緩ませた。

「女子校に行っても言葉遣いって直らないものなんだね。結構なお嬢様学校って聴いてたけど」

コウくんは自然に私の座っているベンチの横に座った。私の言葉は無視されたも同然で、少し腹が立った。そのせいで余計に私の言葉遣いは悪くなった。

「言っておきますけどね、お嬢様学校とか女子校ってものに夢持っ

てるならそんな夢、狗にでも喰わせてしまえ」

「……まあ、だいたい分かるよ。僕だって高校時代は男子校だったからね。同性しか周囲にいないのはろくな事がない」

男子校に行っていたというのは初耳だった。けれどそんな事はどうでもよく、このままコウくんとか話を続けてしまおうというのはすなわちコウくんがここにいる事を認めているのと同じだと思ったので、私は小さなサッカープレイヤー達に視線を戻した。

彼らはコート中央に集まって揉めていた。どうやらファールかどうかの判断がつかなくて、両チームのリーダーが争って、そこからさらに言い争いに発展したらしい。

「おめえはいちいち毎回毎回小さいことにつつかかってくるよな、ケツの穴が小さいんじゃボケ」「ボケとはなんだボケナス小さいんはお前だチビ。もういいから黙れ」

「死ね」

「なんだよ聞こえん、はつきり言えよ」

「知らん、死ね」

「なんだと。お前が死ね」

まるで餓鬼の言い争いだ。いや、小学生の喧嘩だからそのまんまか。いくら子供の喧嘩とはいえ見ていて気持ちのいいものではなかった。そしてついに、一人の少年が相手チームの子の頭をゲンコツでボキヤラと殴ったのをきっかけに、みんなゲンコツを振り上げて相手の頭をボキヤラボキヤラと殴る試合になった。

子供の悪意は純粹だ。脂ぎった中年オヤジみたいな、はたまた意地の悪いOLみたいなネチネチしたパワハラとかセクハラのしつこさはなくて、理性なんかの混ざりようのない、ただゲンコツを相手の鼻にあてて鼻血出させたいとか精々そのくらいの、後の事を考えない喧嘩。

マスコミとか上司とか近所のオバチャンの目にがんじがらめにされてしまった大人には絶対できない喧嘩だ。大人は相手の頭をボキヤラと殴る代わりにパワハラとかセクハラとか、そんな事をする。

だからこそ大人に近づいてしまった私はああいう喧嘩を正視できない。あんな純粋な悪意を他人にぶつけるのを見てしまったら、そんな悪意のぶつけかたが羨ましくて私もしたくなる。胸の中にたまった色んなもやもやをゲンコツに変えてボキヤラボキヤラと殴りたくなる。

「……ねえ、止めてきてよ」

中、高と男の子から離れて暮らしているだけに、男子の喧嘩の仲裁をする自信なんてない。仕方なく隣にいたコウくんに助けを求めた。

「何で？」

だというのにこの男は暢気そうな顔をして平然と事の成り行きを見守っていた。

「何で、って、ほら、怪我でもしたら大変じゃない」

「あのくらいの子供同士の喧嘩なら、そうそう大きなけがなんてしないよ。武器も使おうとしてないし、周りに頭を打ちそうな障害物もないしね」

「そんな！」

私はベンチから立ち上がった。立ち上がって、それで何がしたかったのかは分からないけど、とにかく何かがしたかった。口で言った通り喧嘩を止めたかったのかもしれないし、あのボキヤラ戦争に混ざりたいだけかもしれない。

コウくんはそんな私を見透かしているような目をして、私の手首を握った。

「だめだよ、止めたら」

コウくんの目は透き通っていて、ゲンコツ振り回しているあの子供たちみたいだった。その目の奥に私の目が写っていて、その目にはコウくんの姿が写っていた。

「見ていたほうがいい」

4（終）

喧嘩はあっけなく終わった。近くで井戸端会議をしていたお母さん方が喧嘩に気付いて飛んできた。飛んでくる母親達に気付いた子供達はボキヤラボキヤラを止めて代わりに仮面ライダーごっこに切り替えた。子供は純粹だけど狡猾だ。でももちろんそんな言い訳は通用しなくてお母さん方は表面上は謝って子供の頭を下げさせた。けれどその目は『宅のぼっちゃんの顔に傷がついたらどうするつもりでざましょ！ 全く嫌になっちゃうわ、岡崎さん家の子ったら下品で！ それに比べてなんて可愛いんでしょウチの子ったら！』『それはこっちのセリフよデブ女。あんな猿みたいな子のどこが可愛いんだか。あの子供の父親はお猿さんかしら。そうじゃなくつてもヒトにあるまじき貧相なご尊顔に違いないわ。ああこんなに泥がついてかわいそうなお坊ちゃん。今夜はこの子の好きなカレーライスにして二人で喧嘩した子の悪口を言いやってやるざます』と言いつ合っていた。もちろん私の想像ざます。

コウくんが自販機からジュースを二本買って、ベンチへ戻ってきた。私はコウくんからソーダをもらって缶のプルタブを開けた。コウくんはコーラ。

「何で見ていたほうがいいなんていったの？」

コウくんが私を止めたのには理由がある気がした。単純な理由じゃなくて、コウくんらしい何か特別な理由。もちろん私にコウくんらしさなんて分からない。分かるのは箱の中で粘土をこねくり回すみたいに造ったギリシア彫刻のコウくんだけだ。

「参考になるんじゃないかと思って。千登勢の」

コウくんはまた私の隣に座って、缶を開けようとした。しかし深

爪をしているのか中々開かないようだった。

「私の？」

「無理して大人ぶってると思ったんだ。何となくだけど」

「私が子供だつて言いたいの？」

「当たらずとも遠からず」

「うるせえハゲ。リア充爆発しろ。死ね。氏ねじゃなくて死ね」

私はコウくんの手からコーラを奪い取り、開けてやってからコーラをぐいっと一口飲み、コウくんへコーラを突き返した。コウくんは苦笑いを浮かべた。

「……いったいどこからネットスラングみたいな言葉を覚えてきたのやら。そういう言葉はインターネットの中だけで使ったほうがいいよ。じゃないと勘違いされる」

「うるさい」

コウくんは苦笑いをまだ浮かべつつ、コーラを飲んだ。あ、間接キスだ。

「一回素直になつたら？」

「誰に？」

「自分自身に」

「言ってる事がよく分かんない」

「だらうね。僕もよく分かんない」

コウくんがほにやらと変な笑いを浮かべる。

「何それ」

「いや……何ていうか、ね。何か声かけたほうがいいような気がする」

コウくんがベンチから立ちあがった。もうコーラは飲みきつたみたいだった。

「帰るよ」

「さっさと帰れー」

バイバイ、と手を振ってコウくんはいなくなった。あつという間にいなくなってしまった。なんだつたんだろう。そばにいられたく

ない時にいて、もうちょっと話がしたいなと思う時に限っていなくなってしまう。

私はコウくんが買ってきたソーダの缶を見つめ、ぐいっと飲んだ。喉が焼けつくような炭酸が口の中へ広がり、胃の中へと落ちていった。きつと胃の中へ落ちたソーダは私の身体の中へ浸透し、色んな器官を巡っていくんだろう。だからきつと、排出されるその時まで私とこのソーダは一心同体の存在だ。

また夢の中にいる。箱みたいな四角い部屋の真ん中で、ソファーに座っている。隣にはギリシア彫刻みたいなコウくんがいる。

「愛しているよ」

私の耳元で囁いてくるこのコウくんを、箱の中から追い出さなければいけないと思った。

どうすればいいんだろう、と考えた時、昼間の子供たちの姿が脳裏に浮かんた。素直になればいいんだ。あの子たちみたいに。

私はゲンコツを握りしめた。

ボキヤラ！

4 (終) (後書き)

以上で終わります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3787y/>

イン箱

2011年11月17日03時29分発行